

ビジネスパーソンが抱く英語の基礎力像 —アンケート調査の単純集計から—

柴田 晶子

専修大学北海道短期大学

(Abstract)

In this global society, business persons regard English as an essential tool for international communication. Naito et al. (2007) showed that business persons who use English daily in their business transactions emphasized the importance of the basics of English. It is, however, unclear what 'basics' actually refers to. The result of the web-based questionnaire we conducted in this survey shows that you need the STEP 2nd level to acquire the basics of English. Even though more than 90% business persons emphasized the importance of learning vocabulary, it turns out that the four language skills, namely reading, writing, listening and speaking, are equally important for the acquisition of the basics in business communication.

1 はじめに

グローバル社会の到来によって、英語に対する考え方が少しずつ変化してきている。海外進出を大きく前進するために、英語研修を強化し、社内での使用言語を英語に切り替えることを宣言する企業も出てきた。英語の基本語 1,500 語を駆使することでコミュニケーションを成立させるグロービッシュというアプローチも話題に上ることが多くなっている。世界的に見ても、英語を母語とする人よりも、英語以外の言語を母国語とする英語使用者の数が増えてきたことを受けて、World Englishes や Lingua Franca という考え方が広まってきている (Jenkins (2007)、Murata and Jenkins (2009)などを参照)。発音や文法を母語話者並みに習得するのではなく、英語話者それぞれが持つ言語背景を受け入れて、英語をコミュニケーションのツールとするという考え方が広まってきたようである。

このような英語に対する考え方の変化は、英語を使用する人が急増していることとも関係している。内藤他 (2007) が行った産業界の英語使用実態調査では、地方の小規模事業所においても日常業務で英語が使用されていることが明らかにされている。また、英語使用者の使用状況の調査からは、法的な問題と関わる契約や、大きな取引へと発展させるための社交など、経験豊かなビジネスパーソンでなければ果たすことのできない業務を除け

ば、日常的な業務は非常に簡単な英語表現でやり取りされていることが指摘されている。このような背景の中で、英語を使用する業務に携わるためには基礎的な英語力が重要であり、基礎的な英語力さえあれば業務遂行に問題はないとする意見が多く見られた。

このビジネスパーソンが指摘する基礎的な英語力の育成を英語教育の場で実践することが理想であるが、問題はその基礎的な英語力が一体何を指し示すものであるのか、残念ながら一連の調査では明らかにされていない。そこで、本研究では、英語を日常的に使用する社会人に調査対象を限定して、ビジネスパーソンの考える仕事で使える英語の「基礎力」が具体的にはどのようなものを示しているのかを探ることとした。本論文は、この目的のために実施した「仕事で使う英語と英語の基礎に関するアンケート調査」の単純集計結果を報告するとともに、その結果について考察する。

2 調査の方法

調査は、2つの予備調査を踏まえた上で、インターネット調査会社を通じた Web アンケート方式で実施した。

予備調査の1つ目は、漠然としている「英語の基礎力」という概念を調査項目として具体化するために実施した。まず初めに、ESP 北海道研究会の各会員が所属する勤務校6校で授業を担当している学生を対象に、「英語の基礎力」としてイメージする事柄について自由記述形式による回答を求めた。各校共通に実施した実際の質問は以下の通りである。「社会人を対象とした英語の調査で、英語は『基礎』が大切であるとの結果が出ました。『英語の基礎』と聞いたとき、具体的にどのようなものを基礎力としてイメージしますか。具体的な学習方法、英語の授業や学習項目を挙げてください。次に、ここで得られた回答をカテゴリー化し、調査の項目を作成した。

予備調査の2つ目は、調査対象者を仕事で英語を使用している社会人に限定することを目的とした。インターネット調査会社を通じて、その調査協力回答者に「あなたは仕事で英語を使っていますか」という質問を投げかけ、「使わない」を選択した回答者を排除した。そして、英語を何らかの形で使用している人に対してのみ、本調査への協力依頼を送付した。

本調査は、インターネット調査会社を通じて、2003年3月に調査協力依頼がメールで送付され、任意で Web アンケートに回答する形式で行われた。予備調査で英語を使用しない人は既に排除されていたが、不正回答を防止するために、「あなたが関わる業務全体を100%としたとき、英語を使う仕事は何%ですか?」と尋ねて、「0%」と回答した対象者は排除した。その結果、回答は合計501名から得ることができた。

調査項目は、英語の使用割合、使用期間、使用技能、ツール、業務内容など使用状況に関する質問、基礎力として考える単語・熟語、文法、日常会話、「読む・聞く・書く・話す」の4技能などの重要度や到達レベルと内容に関する質問、英語の学習環境、学習期間、学

習時間、学習開始時期などに関する質問であった。

3 結果

3.1 予備調査

本調査に先立ち、回答者をスクリーニングするために実施した質問ではあるが、本調査の結果報告に先立って、ここに併せて示す。

3.1.1 英語の使用頻度

最初の質問はどれぐらいの頻度で、仕事上英語を使っているかを尋ねたものである。この設問に対し、「使わない」とした回答者は本調査の対象からはずすこととした。

表1 使用頻度 (%)

毎日	週数回	月数回	年数回
30.9	25.6	31.1	12.4

5割以上が週数回以上使うビジネスパーソンで、最終的に、本調査には501名から回答を得ることとなった。

3.1.2 英語の重要度

予備調査の第2問目として尋ねたのが、英語の重要度である。現在及び将来のキャリアアップと英語との関係を問うたところ、大いに関係があると考えている回答者が9割を超えていることがわかった。

表2 キャリアアップと英語 (%)

重要	どちらかという と重要	どちらかという と重要ではない	重要ではない
51.9	38.1	8.0	2.0

3.2 本調査－英語の使用状況

まず、調査回答者の英語使用状況について、業務上の使用割合と使用期間、業務上で使用する英語の習得方法、業務上で使用する技能、使用ツールについての結果を順次見ていくこととする。

3.2.1 業務上の使用割合

業務全体に対する英語を使う仕事の割合を尋ねた設問である。10%程度との回答者が4

割近くを占め、30%程度までの回答者が7割を超えた。担当業務の半分以上との回答は2割程度に止まり、全体としては、業務の一部として英語を使用していることが伺える。

表3 業務上の英語使用割合 (%)

10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%	80%	90%	100%
38.52	19.56	15.37	5.59	6.99	2.79	4.99	3.39	2.20	0.60

3.2.2 使用期間

英語を使う業務に、通算でどのぐらいの期間関わっているかを尋ねた質問である。10年以上が3分の1を超え、5年以上の経験を有する回答者が5割を超えた。一方で1年未満と経験の浅い回答者も2割近くとなっていた。

表4 使用期間 (%)

3ヶ月未満	3ヶ月以上	半年以上	1年以上
6.0	3.8	8.4	8.6
2年以上	3年以上	5年以上	10年以上
8.0	13.8	16.4	35.1

3.2.3 業務で使う英語の習得方法

業務で使う英語をどのように習得しているかを尋ねた質問である。

表5 業務で使用する英語の習得方法 (%)

習得方法	大いにある	ある	多少ある	ない
先輩・上司時からの助言、OJT	15.4	16.2	27.0	41.5
業務用単語集・マニュアル・ひな型	11.4	22.4	34.9	31.3
市販の辞書・ビジネス英語学習書	13.2	32.5	31.5	22.8
職場の研修・英語講習	5.6	12.6	20.8	61.1
職場派遣の国内外留学	3.2	4.8	7.0	85.0
職場指定の語学スクール	2.4	7.2	9.6	80.8
職場指定の通信講座	1.6	5.2	9.4	83.8
就職後の個人学習	24.2	23.4	22.0	30.5
学校教育・塾・予備校	12.4	7.0	16.6	54.1
その他	15.5	2.6	2.6	79.4

「就職後の個人学習」については、「大いにある」が4分の1、「ある」と併せると48%にも上る。「市販の辞書やビジネス英語の学習書」が、「大いにある」と「ある」の合計で46%とこれについて多く、しかも「ない」と回答した割合が1番少ないことから、多少なりとも市販のテキストに頼る人が多いことが推察される。これも個人学習に任されていることとの関連が大いに伺える。これに反して、以下の項目に対して「ない」と回答したのは、「職場の研修・英語講習」で61%、「職場派遣の国内外留学」で85%、「職場指定の語学スクール」で81%、「職場指定の通信講座」で84%と極めて高い。「先輩・上司からの助言やOJT」以外には、職場からの支援はあまり期待できないようである。

3.2.4 使用技能

業務では、英語のどのような技能を使うことが多いのかを尋ねた質問である。リーディングの使用割合が群を抜いて多かった。文字を使用する技能と比較すると、音声に頼る技能の使用割合は低いようである。

表6 業務で使用する英語の技能 (%)

技 能	大いにある	ある	多少ある	ない
リーディング	45.3	29.9	19.0	5.8
ライティング	28.5	29.7	30.3	11.4
リスニング	22.2	27.5	32.9	17.4
スピーキング	21.2	24.2	35.7	19.0

3.2.5 コミュニケーションツール

業務で使うコミュニケーションのツールを選択してもらった質問項目である。結果は、「メール・ファックス」が群を抜いており、「大いにある」が4割近くと高率であるだけでなく、「ない」との回答も1割程度に止まっていることから、ツールとしての重要性が最も高いことが明らかになった。

表7 業務で使うコミュニケーションツール (%)

ツール	大いにある	ある	多少ある	ない
直接対話	18.6	23.8	33.5	24.2
電話	13.0	19.2	35.7	32.1
メール・ファックス	38.5	25.6	23.2	12.8
ビジネスレター	14.8	22.2	29.1	33.9
その他	10.2	3.9	1.9	84.0

3.3 本調査－英語基礎力のイメージ

「英語基礎力」として抱くイメージに関して、様々な学習項目についての重要度と到達度、検定試験等について重要度と到達度を、さらに、具体的にはどのようなことができる力と考えるかについて調査した項目の結果を見ていく。

3.3.1 学習項目ごとの重要度

様々な学習項目について、自分が考える「英語基礎力」の要素として、どの程度重要だと考えるかを尋ねた質問である。「重要である:3」、「どちらかというと重要である:2」、「どちらかというと重要でない:1」、「重要でない:0」までの4段階で選択してもらったもので、この数値の平均値を併せて表8に示した。

表8 基礎力イメージにおける重要度 (%)

項目	重要	どちらかという と重要	どちらかという と重要でない	重要ではない	平均値
単語・熟語	52.3	40.5	6.4	0.8	2.44
文法	20.8	42.3	31.3	5.6	1.78
発音	19.6	45.7	27.2	7.6	1.77
日常会話	32.9	43.9	15.6	7.6	2.02
リーディング	41.9	44.7	11.0	2.4	2.26
ライティング	30.5	48.1	17.6	3.8	2.05
リスニング	45.9	38.3	9.2	6.6	2.24
スピーキング	40.9	38.5	13.4	7.2	2.13

「単語・熟語」については9割を超える465人が重要と考えていて、平均値でも2.44と最も高い。「文法」と「発音」については、重要と考えていない回答者が、ともに3分の1を超え、平均値もそれぞれ1.78、1.77と低かった。「日常会話」については、約4分の3が「基礎力」にとって重要と考えていて、平均値も2.02となっていた。4技能については、「重要」と考える回答者だけを比べると、「リスニング」と「ライティング」にはかなりの開きが見られるものの、「どちらかというと重要」まで含めると差は縮む。「重要」「どちらかというと重要」を併せた割合は「リーディング」が86%、「ライティング」が78%であり、平均値で比べても2.26から2.05とあまり大きな差は見られないと考えるのが妥当であろう。

3.3.2 学習項目ごとの到達度

3.3.1 で見た学習項目について、「重要」あるいは「どちらかというと重要」を選択した回答者に対して、「基礎力」としてイメージする到達度を尋ねた結果である。従って、項目ごとに回答者数は異なるが、中学校レベルを 1、大学卒業レベルを 4 として計算した平均値も併せて示した。この表から、全体としては、高校での基本的な学習範囲を少々上回る程度を想定していることが分かる。項目ごとに見ても「リーディング」の 2.50 が最高で、全項目の平均値も 2.34 となっていた。4 技能のうち、「リーディング」と「ライティング」では、大学入試レベルまでを考える回答者が 4 分の 1 近く見られ、中学レベルを想定する人は 16% 程度と少なかった。「リスニング」と「スピーキング」では 2 割以上が中学レベルを選択しているが、他の技能と比べて大学入試レベルを選択した回答者が少ないのも興味深い。

表 9 基礎力イメージにおける到達度 (%)

項目 (回答者数)	中学校:1	高校:2	大学入試:3	大学卒:4	平均値
単語・熟語 (465)	21.1	40.9	22.2	15.9	2.33
文法 (316)	26.6	42.7	18.7	12.0	2.16
発音 (327)	27.8	37.3	18.4	16.5	2.24
日常会話 (385)	27.8	38.4	18.2	15.6	2.22
リーディング (434)	16.4	38.3	24.7	20.7	2.50
ライティング (394)	16.0	40.4	23.6	20.1	2.48
リスニング (422)	20.4	37.9	19.4	22.3	2.44
スピーキング (398)	22.9	37.2	18.8	21.1	2.38

3.3.3 検定試験の重要度と到達度

実用英語技能検定試験 (英検) と TOEIC について、「英語基礎力」のイメージとしての重要度と到達度を尋ねた。表 10 に 501 名の回答結果を示した。重要度については、4.3.1 と同様に、「重要である」から「重要でない」の 4 段階からの選択である。社会人には、英検よりも TOEIC を重視する傾向が見られ、「どちらかというと重要」まで含めると実に 7 割以上の人々が、「英語基礎力」との関連で、その重要性を意識していることが分った。

表 10 検定試験等の重要度 (%)

検定試験	重要	どちらかという と重要	どちらかという と重要でない	重要でない
英検	5.6	32.7	41.3	20.4

TOEIC	26.8	44.3	18.4	10.6
-------	------	------	------	------

次に到達度であるが、上述の英検と TOEIC のそれぞれの重要度についての質問に対して、「重要」「どちらかという重要」を選択した回答者にのみ尋ねた結果を表 11 に示す。

表 11 検定試験の到達度 (%)

級 (回答者数)	3 級	準 2 級	2 級	準 1 級	1 級	分らない
英検 (192)	13.5	16.2	38.0	10.9	4.2	17.2

得点(回答者数)	~220	220~469	470~729	730~859	860~	分らない
TOEIC (356)	4.5	18.0	45.8	12.1	3.7	16.0

英語の基礎力到達度レベルとしてのイメージは、英検では平均値が 2.14 級と、ほぼ「2 級」レベルとなった。TOEIC については、各選択肢の得点幅が広いため正確な数値とは言いがたいが、各選択肢の中間点をもとに平均値を算出すると 561 点という結果となった。

3.3.4 到達内容

さらに、「英語の基礎」の到達度に関しては、具体的にどのようなことができる力と考えているのかを「リーディング」「ライティング」「リスニング」「スピーキング」の 4 技能それぞれについて尋ねた。その結果が表 12 である。実際の選択肢には、英検の Can-do リストを参考にして以下のような具体例を載せた。英検 4 級から 3 級に相当する「身近で簡単な内容への対応」に関しては、「招待状などの日時や場所が読める、短い文が書ける、ゆっくりした会話が分り、聞き返すことができる。」、英検 3 級から準 2 級に相当する「短い説明のある内容への対応」では、「公共施設などのお知らせや注意事項が読める、3 行程度の日記が書ける、電話で短い伝言を受け取り、レストランで注文ができる」、さらに英検 2 級に相当する「まとまりのある内容への対応」では、「日本語の注のある英語の書物が読める、旅行の内容を伝える文章が書ける、公共の場でのアナウンスがわかる、遅刻や欠席の理由が言える。」、英検準 1 級から 1 級に相当する最後の「社会性の高い内容への対応」では、「英字新聞の記事が理解できる、留学や入社などの志望動機が書ける、観光地でのガイドの説明がわかる、時事問題に関して自分の考えが言える」である。

表 12 4 技能の到達内容 (%)

具体的にできる事柄	リーディング	ライティング	リスニング	スピーキング
身近で簡単な内容への対応	10.2	14.2	14.4	14.0

短い説明のある内容への対応	35.9	37.3	33.9	37.1
まとまりのある内容への対応	40.1	37.3	41.5	38.5
社会性の高い内容への対応	13.8	11.2	10.2	10.4

全体としては、この設問でも、2 級レベルの「まとまりのある内容への対応」を選択した回答者は一番多かったが、単に「級」だけを選択した表 11 の結果と比べると、具体例を見たことで、若干、下の級に引き寄せられた印象である。技能別に見ると、「リーディング」には他の技能と比べて高めの到達度を求めていることが伺える。

3.3.5 習得方法

「英語の基礎」を身につける方法として良いと思うものを 4 つ選択してもらった結果である。選択者の多かった順に表 13 に示す。

表 13 英語の基礎の習得方法 (%)

項 目	%
海外で生活する	54.1
外国人英語教師から学ぶ	45.5
対話を通じて学ぶ	45.3
日常的な反復練習をする	40.3
海外に留学する	35.1
語学スクールで学ぶ	26.2
自学自習で学ぶ	24.4
英語に力を入れた学校教育を受ける	22.8
音声・映像媒体を使って学ぶ	21.4
一般の学校教育を受ける	19.0
教師とマンツーマンで学ぶ	16.8
本や雑誌を使って学ぶ	11.2
コンピュータやネットワークを使って学ぶ	11.2
教科書・市販のテキストを使って学ぶ	10.8
塾や予備校で学ぶ	5.0
短期集中的な学習をする	4.2
教室で他の学習者と学ぶ	3.6
日本人英語教師から学ぶ	3.4

「海外で生活する」が1番多いのは予想されていたが、「海外留学する」の1.5倍にもなっているのは興味深い。教育の場を超える実生活での体験の効果を期待していることが伺える。「外国人教師」も高率であり、「海外生活」や「海外留学」とともに、英語しか使えない環境が、英語の基礎を培うのに役だつと考える回答者が多いことが推測される。「対話を通じて学ぶ」も、45%を超えており、学校教育での指導方法を考える上では、考慮すべきことかもしれない。「日常的な反復練習」が4割を超えているのは、語学学習としては当然の選択結果ともいえないが、わずか4%という「短期集中」とは対照的な結果となっている。

学習のツールとしては、「音声・映像媒体」が21%と、「本や雑誌」「コンピュータやネットワーク」「教科書や市販テキスト」などのおよそ2倍となっている。

学校教育については、「英語に力を入れた学校」と「一般の学校」の差があまり見られなかった。

3.3.6 学習の頻度・時間・開始時期

英語の基礎力を身につけるために、どのぐらいの学習が、いつの時期に必要と考えるかを尋ねた質問である。

表 14 英語学習の頻度・時間・開始時期 (%)

	毎日	週数回	月数回	年数回
頻度	60.5	33.9	4.6	1.0

	15分	30分	1時間	2~3時間	3時間以上
時間	15.4	37.9	35.3	7.8	3.6

	入学前	小学校	中学校	高校	18歳以降	時期不問
開始時期	13.2	24.4	20.2	5.8	3.4	33.1

学習の頻度としては、「毎日」が6割と圧倒的に多く、前問で「日常的な反復練習」が4割と高率だったことと合致する結果となっている。「週数回」を選んだ回答者も3分の1を超えた。学習時間については、「30分」「1時間」が拮抗していた。学習開始時期については、「時期は問わない」とする回答者が3分の1で一番多かったが、しかし、本年平成23年度に開始された小学校における外国語活動の必修化以前の調査ながら、「小学校」を選択した回答者も4分の1見られ、「小学校入学前」の13%と併せると、4割近い回答者が低年齢で英語学習を始めることを望ましいと考えているのがわかる。

4 考察

回答者の英語使用背景としては、65%以上が業務で英語を3年以上使用しており、使用場面としては、メール・ファックス、そして直接対話などが多い状況である。その業務で使う英語は、過半数が就職後の個人学習で習得している。このような背景を持つ英語使用者が思い描く英語の基礎力としては、単語や熟語を重要視する声が一番大きく、文法や発音はあまり重要でないと捉える人が3割いるという結果であった。英語の基礎力のレベルとしては、高校から大学入試レベルの中間、英検であれば2級レベル、TOEIC であれば500点台が平均的なイメージであった。英語の学習環境としては、習得時期については高校以前に身につけるとの声が6割近くに達し、学習時間については9割以上が1時間以内の学習を週数回以上とし、学習スタイルとしてはネイティブとの会話を通して学習することを好む傾向が見られた。

大学教育の現場では、リメディアル教育と称して、中学校レベルの復習からスタートすることも多い現状を考えると、ビジネスパーソンの抱く英語基礎力像が、高校から大学入試、英検2級、TOEIC500点台というのは、思いのほかレベルが高い。また、基礎を身につける学習環境として、小学校入学前から小学校の時期が3割に達し、母語話者とのやりとりを志向する傾向を見ると、実際に現在学校で行われている英語教育とはかけ離れたものを求めている様子が分かる。回答者の過半数が業務で使う英語を個人学習で習得したと考えていることから伺えるが、総じて、現在行われている日本の英語教育がビジネスパーソンの考える基礎力習得の場としてはふさわしくないようである。

個別の項目を見ると、特徴的であったのは、単語・熟語の習得を重要と考えるビジネスパーソンが非常に多かった点である。これは専門性の高い内容であればあるほど、専門用語の習得なしでは英語が使えない、という実情を考慮すれば当然の結果と言えるだろう。しかし、注意すべきは、これは単語・熟語さえ覚えれば十分と考えている訳ではないという点である。4技能の習得内容に関する項目によると、「身近で簡単な内容への対応」という選択肢を選んだのは10%から15%にすぎない。より大きな単位での英語を必要とする「短い説明のある内容」が35%前後、「まとまりのある内容への対応」が40%前後の回答者に選択されていた。つまり、単語レベルの学習を踏まえて、さらにその単語を組み合わせ、文、文章レベルへと引き上げなければ基礎力とは言えないと捉えていることが分かる。結果的には、それが高校レベル以上の英語を基礎力として求めていることにつながっていると考えられる。

もう一つ注意すべき点は、このレベルの高さが必ずしも文法学習と結びついていない点である。英語の基礎力としての到達度の平均値は、全ての項目において、高校レベルから大学入試レベルの間と想定されていたが、文法の到達度の平均値は2.16と最も低かった。また、重要度についても、文法は発音と同様に最も低いものであった。文法はあまり重要でないと考えるビジネスパーソンは実に3割を超えている。「まとまりのある内容への対

応」をするためには文法は必須のはずであるが、その文法に対するイメージは英語教育の現場で教えられている文法とはずれていると捉えるべきであろう。文を組み立てていく能力は必要だが、それは学校の英語教育での学習内容とは違うと捉えているのである。

学習頻度と学習時間に注目すると、毎日が6割、週数回が3割強と高頻度で学習することを求めている、約9割が1時間以内を学習時間として挙げている。つまり、英語の基礎力は、比較的短めの学習時間を毎日のように継続することによって身につけるものと考えている。外国語の習得は、一般的には、短期集中で学習することが効果的であり、また一度習得したものは、短い時間でも定期的に使用することで維持されると考えられている。したがって、ビジネスパーソンが描く学習スタイルを考慮すると、就職時点ですでに身につけていなければ、就職後に英語の基礎力をつけることは難しいことが分かる。まして、ビジネスパーソンの多くが望むような、日常生活において母語話者と対話する時間が十分に設けられた学習環境を実現することはほとんど不可能に近い。

5 おわりに

ビジネスパーソンが捉える英語基礎力像は、その到達度が現在の平均的な英語教育で達成できるレベルよりもはるかに高いこと、また、その学習内容についても、実際にビジネスパーソンが使う英語との間にはずれがあると認識されていることが分かった。現状では、難関大学に合格できるような学生であれば、英語基礎力を身につけていると言えそうだが、その場合でも、オーラル面での強化は必要であろう。

近年の情報革命がもたらしたこのグローバル社会、ボーダーレス社会の到来という状況を考えると、英語を必要としているのは、難関大学に合格するようないわゆる「できる学生」だけではない。もっと幅広い人たちが仕事の場面で英語を使用するようになってきている。現在、英語を使用している人たちが実感している英語基礎力のレベルを考慮すると、学校における英語教育には、これまで以上の基礎力強化のための対策の充実が求められているといえる。

文系理系を問わず英語は受験科目であるので、難関大学を突破した学生は、すでに大学受験の準備で経験した比較的地味な基礎トレーニングを続けて行う動機づけは高いかもしれない。しかし、難関大学を志望しなかった学生の中には、高校の英語学習で躓いたものも多く、高校までのやり方を大学の時期に繰り返しても英語に対する嫌悪感がつのるだけで、英語の基礎力習得にはつながりそうにない。高校までの学習内容を十分に習得できていない学習者を対象とする場合には、英語教育にもこれまで以上の工夫が必要となる。モチベーションを引き上げるためには、やはり、学習の動機づけに注意を払うことが必要となる。ゆとり世代と揶揄されることも多い現在の学生たちには、なぜその学習が必要なのか、なぜそれが利益となるのか、その説明が必要となるだろう。将来、どのような場面で、どのようなレベルの英語が使われることになるのか、その将来像を提示する必要がある。

本調査では、英語を日常的に使用するビジネスパーソンが抱く英語の基礎力像に関して、大枠は捉える事ができた。さらに、その具体的な内容については、研究を進めなければならない。英語を既に使用している人たちにその英語基礎力の中身を聞くことは、プロフェッショナルに技術習得のコツを聞くことに似ているかもしれない。参考意見とはなるが、より汎用性の高い学習方法につながるとは考えにくい。どのような内容をどのような方法で学ぶべきかについて知るためには、やはり、応用言語学者が英語使用者の使用状況をつぶさに観察することで、英語力が何であるかを同定することが必要となる。

参考文献

- Dudley-Evans, T., and St John, M. J. (1998). *Developments in English for Specific Purposes: A multi-disciplinary approach*. Cambridge University Press.
- Jenkins, Jennifer. (2007). *English As a Lingua Franca: Attitude and Identity* (Oxford Applied Linguistics). Oxford University Press.
- Murata, K. and J. Jenkins (eds.). (2009) *Global Englishes in Asian Contexts: Current and Future Debates*. Palgrave Macmillan.
- 小池生夫、他 (2008). 『企業が求める英語力調査報告書』平成 16 年度～19 年度科学研究費補助金 (基盤研究(A))
- (財)国際ビジネスコミュニケーション協会 (2009). 『企業・学校における英語活用調査—2009 年』2011 年 3 月 10 日現在 : <http://www.toeic.or.jp>
- 深山晶子 (編) (2000). 『ESP の理論と実践』三修社
- 内藤永、吉田翠、飯田深雪、三浦寛子、坂部俊行、柴田晶子、竹村雅史、山田恵 (2007). 『北海道の産業界における英語のニーズ』平成 17 年度～平成 18 年度 財団法人北海道開発協会助成研究 ESP 北海道
- 内藤永、柴田晶子、坂部俊行、竹村雅史、山田恵 (2009). 『職場における英語使用者が抱く英語基礎力像』第 48 回 JACET 全国大会シンポジウム発表資料 ESP 北海道
- 日本英語検定協会 (2006). 『英検 Can-do リスト—英検合格者の実際の英語使用に対する自信の度合い—』財団法人 日本英語検定協会